

袋小路に入った国内政治

盛田 常夫

ハンガリーの国内政治は秘密警察をめぐる議論で沸騰している。1989年の体制転換からすでに12年も経過し、今なぜ旧体制時代の秘密警察が問題になるのか。そこにはハンガリーの体制転換の特殊事情が絡んでいる。

中欧の体制転換と秘密警察

他の中欧諸国ではすでにこの問題は1990年代の初めに処理された。周知のように、もっとも極端な事例は、国民の3人に1人が秘密警察に関係していたといわれた東ドイツである。友人、同僚、場合によっては夫婦の間ですら諜報活動がおこなわれていた。極端がすぎると、諜報活動の意味すら失われる。悲劇を通り越して、喜劇的ですからある。戦前の日本の隣組のような住民の相互監視システムが、東独社会のなかで機能していた。ナチス社会を経験した民族が、再び、互いに互いの首を締め合うシステムを形成してきた歴史から、我々が学ぶべきことは多い。

チェコの場合は、1968年の「プラハの春」以降、反体制派にたいする政治弾圧が厳しかったから、体制転換後における秘密警察弾劾は当然のことであった。旧体制で秘密警察に関与した人物が公職から排除される法律が制定された。旧共産党は政治的地位を失い、反体制知識人が政治権力を掌握することになった。

これにたいして、ハンガリーでは旧共産党改革派が旧体制の解体を促進し、すべての政治勢力が参加した円卓会議を通じた合意にもとづき自由選挙がおこなわれ、権力の交代が図られた。こうしてハンガリーの体制転換は平和裡に進行した。その平和的移行を司った旧体制最後の政府を構成していたのが、ネーメト首相、ホルン外相、メツジェシ蔵相である。平和的移行が実現したことで、旧体制の改革にかかわった人々の過去が事実上、免罪された形になり、ハンガリーでは旧体制を担った政治家が現在もなお現役でいる。

ポーランドもハンガリーと同様に、円卓会議を通して、自由選挙への移行が図られたが、ハンガリーが旧共産党政府主導の平和移行だったとすれば、ポーランドの場合は反体制の連帯が主導する平和移行だった。だから、メジェッシの場合と異なり、1996年にオレクスイー首相が秘密警察要員としてソ連共産党に協力していた過去が暴露されて即座に辞任した。これは反体制主導の平和移行というポーランドの歴史条件から説明される。

政治家と秘密警察

ハンガリーで諜報活動を担っていたのは、内務省第III局。ここには5つの課があり、「敵のスパイから国家機密を防御」する任務をもつI課とII課、市民社会や軍隊での内部通報に協力するIII課、IV課、V課があった。

この第 III 局に収納されているかなりの資料は、体制転換前に廃棄されたか、持ち出されたと言われている。その一部は内務省および共産党の関係者の手に渡り、政治的に利用されてきたとも言われている。今回のメツジェシ首相の資料も 1989 年前後に持ち出されたものが、野党側に渡ったと考えられる。

ハンガリーでも、旧体制の内務省文書をどう処理するかは、時の政府にとって常に頭の痛い問題だった。最初の自由選挙で樹立された MDF 政権は資料の公開を検討したが、資料公開で議員辞職になれば与党の過半数が保証されないことが分かり、それを断念したといわれている。一説によれば、1990 年に選出された国会議員の過半数を超える人物が、旧体制で何らかの形で内務省の諜報活動にかかわっていた。故アンタル首相は情報公開による混乱より、自らの権力掌握のために、これらの機密事項を利用したと語り伝えられている。

反体制知識人が設立者の多くを占める SZDSZ は、最初から、内務省資料の公開を要求していたが、MDF 政権でも社会党政権でも与党（準与党）の立場にありながら、それを実現することができなかった。現在でも、国会議員の 20% は内務省に関係していたと言われるし、メツジェシ自身だけでなく、メツジェシが任命した警察庁長官シャルゴーが内務省の諜報部員だったという過去も暴露された。

悲劇的なのは、メツジェシ辞任を強烈に主張していた FIDESZ 党首ポコルニの父親が、内務省第 III 局 III 課の諜報部員として、1956 年から 33 年間にわたって活動していたという事実の暴露である。明らかに社会党（旧共産党）からの反撃であり、FIDESZ がこの問題に深入りすれば、泥仕合になるという政治的シグナルが発せられた。この事実がブダペスト TV で放映された 2 日後の 7 月 3 日、ポコルニは FIDESZ 党首・国会議員団長を辞任した。父親の過去を TV 放映まで知らなかったこと、父親が 1953 年に 12 年の懲役刑を受けたが 1956 年の動乱で刑務所から解放され、その後の警察の呼びかけで出頭したところ、残りの刑期 9 年との引き換えに内務省の諜報活動協力者となる道を選んだことを、ポコルニは涙ながらに話した。諜報部員に仕立てられる典型的な事例である。

息子は父親の責任をとる必要はない。それが各党首の談話だったが、メツジェシは「だから、過去を早く閉じて、未来に向かうべきだ」と政治的な終結を促している。他方、メツジェシは最高位の国家勲章をホルン元首相 70 歳の誕生日に贈る政府決定をおこなったが、マードル大統領がこれに同意せず、実現しなかった。政治家の誕生日を国家が祝うというのは、旧共産党時代の典型的な名残である。ホルンの過去が暴露されないと限らない現在の政治状況で、このような判断を下すメツジェシの政治センスを疑う。それほどまでにメツジェシはホルンに負うところが多いのか、あるいはホルンの内務省文書はすでに廃棄されて存在しないということか。それにしても社会党指導部の政治感覚を疑う。

SZDSZ や FIDESZ の政治家の父親が内務省に関係している事例は少なくなく、国会で事ある度に、その事実が政治的攻撃に使われてきた。作家エステルハージが最新作で、そのような父親の過去を暴露して話題になったが、あらためて「父と子」の関係から、旧体制の傷跡がえぐりだされている。

なぜ今、秘密警察か

それにしても、なぜ今、秘密警察が問題になるのか。7月4日のエリザベート橋占拠にみられるように、FIDESZとMIEPが国会ではなく、街頭における大衆行動による政治戦術を行使していることと無関係ではない。政権を奪取した社会党がFIDESZ政権時代の乱脈支出を摘発しているのにたいし、FIDESZは別の次元で社会党を攻撃をおこなうという戦術をとっているからである。しかし、その戦術も自縄自縛に陥っている。

他方、いかに平和移行に貢献したとはいえ、旧体制のエリートが依然として政治の第一線にいることのハンガリー的矛盾が、政治を袋小路に導いたともいえる。社会党の旧体制のエリートは順次、引退すべきだ。最高位の国家勲章までもらおうという厚かましが、無用な混乱をもたらすことに気づいていないのだ。

2002年7月